

『現在から未来』

～私たちの姿



毎日新聞大分版 はがき随筆 2010年5月の月間賞・佳作 『59回』

(2010年5月21日掲載・毎日新聞大分版)

これは私の中で新記録だ。1時間で59回もカメラに向かってほほ笑むことは、この先ないと思う。着慣れないスーツと初めての履歴書用写真撮影では、なかなかうまくできなかった。無理やりに口角を上げようとするが、不自然な笑顔になってしまう。撮り終われない写真は、自分の就職活動を暗示しているようにも思えた。

「59枚も撮ることは縁起がいいと思いますよ。5と9で、ごうかく(合格)です」。カメラマンの方の心遣いがうれしかった。私の就職試験は始まったばかりだが、桜が咲くころには自然な笑顔でいたい。(2年・成松美由紀)

成松美由紀さん「妥協はしない」

「日本語表現I」の授業で、エッセイの創作に取り組んだ。毎日新聞大分版に連日掲載されている「はがき随筆」に応募するのだ。わずか250字の文に、自分の思いを込めて表現する。

題として「春」のイメージが浮かんだという。しかし、1回目に提出した文章は「女の子に特有な、よくある文章だ」と指摘された。ショックと悔しさが同時に込み上げてきた。提出締め切りは翌週だった。自宅で書き直した。「私は何を伝えたいのかな」。自分自身と向き合った。5回も6回も、納得のいくまで書き直し

た。妥協はしなくなかった。

その結果できあがった作品が「59回」である。就活のための写真撮影をめぐるエピソードだ。カメラの前で緊張しすぎたせいで、彼女は59回も写真を取り直したのだ。

「59=合格(ごうかく)回」。軽いウィットで締めくくった作品の評価は高かった。新聞紙面にも掲載された。高校時代の恩師が読んでいて、喜んでくれた。教室で、毎日新聞支局長から「月間優秀賞」を授与された。ちょうど、金融機関の2次試験前を控えていた時期。

自分に自信がついた。そして、みごとに合格した。

今春から大分県信用組合に務める。鶴崎の「左衛門踊り」を支援するなど、地元に着した企業風土が気に入っている。

鶴崎の出身。幼い時から縁のある金融機関である。芸短では「SAEMON23」の1年生責任者、2年生では実行委員長を引き受けた。やろうと決めたことには真剣に取り組む。「働きやすい職場環境を作れる存在でいたい」。希望にあふれた笑顔で話してくれた。(文・森本絵美莉)

韓国を学び、中国を学ぶ～本村裕美さん

(平成20年度卒 下川正晴ゼミ出身、熊本大学4年・上海留学中)

この4年間で人生が変わった。

高校生の時に、韓国に関心をもった。それが全ての始まりだった。「知りたい」という知的好奇心から、黙々と勉強した。勉強というより、むしろ楽しい「趣味」だった。「いずれ、韓国で学ぼう」。その頃から漠然と考えていた。

しかし私は今、上海にいる。芸短から熊本大学へ進学後、交換留学生としてやってきたのである。21世紀は日韓2カ国だけでなく、東アジア水準でものを考えなければならない。短大時代にそうアドバイスをいただいたのが理由だ。日韓中英4カ国語を話せる。広告やマス・メディアのプロになる。そんな「二刀流」になることが、私の目標なのである。

私の原動力は、映画関係で働きたいという夢だ。芸短時代に携わった「日韓次世代交流映画祭」をきっかけに、イム・グォンテク、イ・ミョンセという2人の著名な映画監督とメールできるようになった。

夢のために自分が信じる道を、他人とは別の道を選んできたおかげだ。特別なことをしてきたわけではない。自分は何がしたいのだろうか。そのために、どうすべきなのだろうか。それを毎日考えては、年上の方の話をよく聞いてきただけだった。

好きなことを誰にも負けなくらい深めること。目標を持ちひたすら努力すること。芸短時代に学んだことは、私の価値観に大きく影響した。現在、自分の道を模索している人もたくさんいると思う。私も模索中だ。学びたいことがある限り探究すべきであり、その結果、道が開けていくのだと信じている。



写真右:本村裕美